
Sorairo? memorial

sucre*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S o r a i r o ? m e m o r i
a l

【Nコード】

N4989BA

【作者名】

s u c r e *

【あらすじ】

注意

この小説は、amebaブログ、autumn? diaryで既に発表されている

小説です。この小説の作者とameba autumn? diaryの作成者は同一人物です。 ID:love-cosumo
現在、ブログの記事を削除か保存かを検討中です。

今まで普通に生きてきた

雫川 そらら。(みかわ そらら)

そららの、生きる世界は、狭かった。

これから、そららはどんな世界を生き、

どんな日々を送るのか…。

vo1.？ ひじじき雲 (前書き)

？読者様へのお知らせ？

この小説は、ameba autumn？ diaryで既に
発表されている小説です。

この小説の作者とameba autumn？ diaryの
作成者は同一人物です。

尚、コピーは禁止とさせていただきます

vo1・? ひじじき雲

真っ青なそらに、真っ白な白い雲が
流れるように描かれている。

『飛行機雲かあ…』

私は窓をぼんやり見つめる。

私の周りには、お気に入りのキャリーバッグと
洋服がたくさん。

『明日…私も雲の上に行くのよね』

パスポートを取り出す私。

『…不安だな 一人で世界旅行なんて』

世界旅行への切符が手に入ったのは、

『本を3冊同時に買うと 抽選3名様に世界旅行のチケットプレゼント
ント…!』

なんて企画に応募しちゃったせい。

抽選3名だけあたることのできるのに、

その3人のうちの1人になってしまっただけだ？

世界旅行に行けるなんて、滅多にない貴重な体験で、

心の底から嬉しいのだが、

その分…

…寂しい。

誰と一緒にいくわけでもなく、

一人ぼっちで世界旅行…。

旅行には相棒がつきものなんだけど。

友達と一緒にいくことができるのなら、

もう それ以上の幸せはない。

けど、

抽選で当たってしまったものはしょうがない。

それに、こんな素敵なことを神様は私に与えてくれた。

そこにある”現実”を飲み込まなくては。

神様の期待を…裏切っちゃいけない。

…それに、

良い出会いがあるかもしれないし？

? ? ? ? ? ? ? ?

次の日。

チュン、チュン。

ウチに棲みつく小鳥のシユクレのさえずり。

旅を始めたら、シユクレのさえずりも聴けないんだよね…。

シユクレは、私に懐いちゃった小鳥。

私の目覚まし時計。

『はい、どうぞー！少しの間、いなくなるけど…』

心配しないでねー！はい、ゴハン！ゆっくり食べるんだよ』

私の部屋の窓の前に生えている木に、
ゆっくりゴハンを置いてやった。

ピロリン ピロリン

携帯のメールの着信音が騒がしく鳴る。

From 慶那 李々姫

これから空港いくんだよね。

落ち着いてYO！！

一人旅つてのもナカナカぢゃよ

ガンバっていったらっちゃ

愛棒でも見つけて来なネ・・・

リリアからのメールだった。

李々姫は、私の幼馴染であり、心友である

”大切な人”であった。

… 空港に着いた。

荷物を預け、飛行機に乗り込む。

『席は… Aの…』

… 窓際だ。

指定席に座ると、気になる窓の奥を覗き込んだ。

こんな時にお見送りをしてくれる人がいたら…

どんなに嬉しいんだろう…。

『…!!!!』

李々姫だ…！

李々姫が、空港のバルコニーに立って、

手を大きく振っている。

私も手を振り返した。

嬉しくて、嬉しくて、でも寂しくて。

お別れムードなんて、初めて体験するムードだ。

ピロリン ピロリン

李々姫からのメール。

??がんばるんば??

I?you!!

From . 慶那 李々姫

『……………リアの…』

バカッ!』

嬉しい気持ちか、

私の心を一瞬で満たした瞬間だった。

VOI・？ ひじつぎ雲 (後書き)

「当小説をご覧いただき、有難う御座います

楽しい小説を、連載したいと思しますので、

応援宜しくお願いします？

2012・1・13

S U C R E *

vo1.？ 友情の花 (前書き)

この小説は前にも記した様に、sucree*が作成したものです。

私のブログ autumn？ diaryに公開していたものを、

”小説家になるう”さんにご投稿させて頂いています。 ID：1

ove-cosumo

心友 李々姫と別れ、

世界旅行に旅出た そららは、ある一人のセレブお嬢様に出会う
：

彼女との出会いは、そららの運命をどう変えるのか
：

？恋も旅も友達も丁寧に？ 素敵な純粹ストーリー。

vo1.？ 友情の花

飛行機の窓から見るソラには、

鳥もいなく、

ただ あるのは

滑らかな雲だけ。

私は携帯の電源を切つてあるのを再確認し、

メールの内容を思い返していた。

『愛棒：ね』

これから行く国、”ジュリル”は、

宝石と毛皮で有名な国で、

セレブだけ入れる国。

そんな庶民禁制国 ジュリルは、

庶民の格好ではいけないそうだ。

そんなセレブ達が向かう飛行機、

この飛行機は、着飾ったセレブがたくさん乗っていた。

キツネの毛皮の上着を羽織い、ワインを飲む女の人。

自分が付けている指輪を眺める男の人。

なんだか、私には場違いのように思えた。

「ねえ貴女、ジュリルで何をお買いになるの？」

『あっ』

シヨッキングピンクの、ミニスカワンピースと、

煌びやかな銀色のアクセサリをつけた

いかにもセレブな女性（これからセレブ嬢と呼びます）だった。

『あ、あの その、私は世界旅行のチケットの

応募にあたって…。あなたみたいにセレブじゃないですし』

「セレブ…ね。 ……そんな馬鹿な！」

私はえっ、と漏らしたが、

すぐ口をふさいだ。

「貴女のどこがセレブなのよ。」

とかいつちやって…。

「ねエ、貴女。私たち、なんか 運命を感じない？」

『え!?!』

「ふふっ」

セレブ嬢は、指に はめている

いかにも高級な指輪を、ひとつ外した。

「はい、これ。」

『あ、え……っえ??』

セレブ嬢は、にこっ、と微笑んだ。

「友達の証よ」

『でも、こんな高そうなもの…』

「高くないわ、安ものなんだけど、…ごめんなさいね？」

絶対高いな…

ダイヤモンドがちりばめられてるし…。

『も、もらえませ…』

「あのね、貴女、そこは”ありがとう”の一言だけでいいの！
深く考えすぎるのはだめよ」

『はあ…そうですね』

「はい、一言は…」

『あ、ありがとうございます』

「そう、その一言でいいのっ」

…あ、えと 申し遅れました、如月財閥の社長の娘、

如月 璃慶です」

『…財閥って…』

いかにもお嬢様系っぽいムードを醸し出している。

『私は雪川 そららです』

「そらら…？ちゃんね！まあ、りるって軽く呼んで？」

『あ…は、はいっ…解りました』

これが、私と いるの出会い。

その瞬間に、もう 友情の花は芽吹き始めていた
…。

vo1.???ラルシエール? (前書き)

この小説は前にも記した様に、sucree*が作成したものです。

私のブログ autumn? diaryに公開していたものを、

”小説家になろう”さんにご投稿させて頂いています。 ID:i

ove-cosumo

心友 李々姫と別れ、

世界旅行に旅出た そららは、社長令嬢 如月 璃屢と(りる)と

出会い、

宝石と毛皮の国 ジュリラへと足を踏み入れることとなった。

そららと、りるの運命はいかに!?

?恋も旅も友達も丁寧に? 素敵なお純粋ストーリー。

VOI・???ラルシエール?

待ちに待った

ジュリラに到着!!

ジュリラには、一泊するのだ。

キャリーバッグを取り出さなくては。

そして、私は荷物受取場へと向かった。

『あれ…』

私の荷物が ない…。

「はい」

私のキャリーバッグが、りるの手に…

『あ、ありがとうっ!!』

りるは微笑む。

「キャリーバッグは邪魔だから、もう直接 ホテルに送つとしてもらおう？」

あ、あと、一緒に店、回ろうよ。…ねっ!」

私はコクン、コクンとうなづく。

そして、私たちは空港を後にし、ジュリラの街へと入って行った。

”ク・アンシエ公園”

アンティーク調な公園をゆっくり、散歩する私たち。

辺りは、木々が紅葉を迎えていて、綺麗だった。

「綺麗な公園ね」

思わず笑みがこぼれる。

『うん…！世界の中で一番きれいかも？』

りるは、大爆笑した。

私も、もらい笑いをし、笑った。

今、ふと 思いついたのだが、

りると一緒にいると、なぜだか気持ちがほかほかする。

なんだか、ほっこりして

気持ちがゆるまる…。

気の許せる、いい友達になれたのかもしれない…。

『ジュリラの季節は、秋なんだねっ』

「そうなの、秋なの」

『いいよね…秋って』

「うん … そうだよね〜 …… あっ」

『どづしたの?』

「ほら見てっ、空に虹がかかってるよっ」

『…!』

綺麗な、七色の虹。

雨上がりの、しっとりした空気に包まれて、

虹はきらきらと煌めく。

『綺麗だね …』

「……………そうだった!!」

『!?!?』

何か素敵なことを思いついたようになり、私の手をつかみ、走り出した。

『な、何なの?急にっ』

「幸せの青い鳥を見つけに行くのっ」

『……?何で虹で幸せの青い鳥思い出した!?!?』

「まあ、それは後でわかることよ!!走ろっ!!」

私たちは、息切れする程、思いっきり走った。

しばらくして、心臓がバクバクいって、うるさくなった頃。

私たちは、そこらのベンチに座り、休んだ。

「ふへー……、良い運動になったあ……」

『そっだねえ……』

「……ここで一回 紅茶でも飲もう?」

『うん……五分ぐらい休みたい気分だった……』

りるは、水筒からコップに、紅茶を注ぐ。

辺りの気温と、紅茶の温度の差が激しいみたいで、
もくもく、ふわふわと湯気が出る。

「はい、どござ」

りるに紅茶を貰って、私は手を暖める。

手が、かじかみ気味だったのが、するするとほどける様に、
じわじわ、暖まってくるのを感じることができる。

りるは、紅茶をごくんと飲みほした。

「ねえ、そららはもしかしたら、猫舌？」

『うん、そうなの…。でもね、丁度 手がかじかみ始めちゃって
たし、

手を暖めてから飲もうと思って。』

「じゃあそららの手、暖かいんだ!!…んじゃあ…」

『…!!冷たッ!!…!!』

りるの手が、私の手に触れる。

『……やめて……』

「あゝ、本当 暖かい」

二人でフザケあつて、笑い合つた。

『…あ、話変わるけど、幸せの青い鳥って…何?』

「ああ、噂なただけだよ、…ここ ジュリラにね、

ラルシエールっていう雑貨屋さんがあつて、そこには

幸せの青い鳥のタマゴが売つてて、普通の人は、その

タマゴ、見えないんだけど、そのタマゴが選んだ人だったら

見えるっていう…。それを、確かめようと思って、今、ラルシ

エールに

向かつてるとだよ。」

そうか…。噂検証つてヤツね。

『面白そうだね、…そうと聞いたら早く行きたくなってきた?』

私は、りるにコップを返し、バッグを持って、立ち上がった。

『行こう!!ラルシエール!!!』

「幸せの青い鳥のタマゴ、見つけにね!…!」

そうして、私たちは、青い鳥を見つけに、ラルシエールに
向かったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4989ba/>

Sorairo?memorial

2012年1月14日01時07分発行